

稻では、本菌の侵入の最適期である7月下旬から8月上旬にかけて、莖葉は十分に繁茂して株間湿度も高くなり、葉鞘は黄化し始めて侵入を容易ならしめる他に、その後続く高温度は病気の進展に追車をかける事になる。之に對して、中晩～晩生種は侵入時期も遅れ且、侵入後の気温は次第

に低下する爲に、病気の進行の抑制せられる事は容易に想像し得られる。又、中晩～晩生種では、病菌の侵入時期に於ける生菌核数が、早、中生の場合に比べて減少していることも、發病を少なくする一つの要因と思惟せられる。

(新潟縣立農事試験場)

稻紋枯病の被害について

小野小三郎 • 上原久八郎
森橋俊春 • 武田マサ子
黒田孝子

紋枯病による稻の被害がどの程度にあるものかについては古くから研究されているところであるが、この被害が環境その他によつて左右せしめられることについて調査した成績を報告することにする。

1) 8月6日から1週間毎に發病調査を行い、發病期と籾重との關係を調べたところ、發病の早いものほど被害は大であつた。

2) 33品種の稻について發病株歩合を調べたところ、最も少ないものでも30%、最も多いものでは90%を示した。熟期の早いものに發病の多いことが見られる。

3) 紋枯病による枯死葉の程度は品種により相當差があり、大体の傾向としては早生のものほど枯死がひどい。

4) 本病による被害(籾重の減少)も亦品種によりかなり差があり、これ亦被害のひどいものは早

生に多く、晩生のものでは被害が比較的少ないことが知られた。

5) 湛水、濕潤及び落水乾燥の3区を作り、紋枯病の發生を見ると、湛水区に發生が多く、濕潤区これに次ぎ、乾燥区では非常に少なかつた。健全稻の籾重は湛水の場合に重いが、病氣によつて害される程度はひどい。乾燥区にあつては病氣により減少せしめられる籾重は比較的少ない。

6) 3要素肥料を變へた場合及び石灰と窒素肥料の施用量を變へた場合の本病による被害を見ると概して、窒素肥料の多い場合には被害が大きい様に見られる。

7) 紋枯病による被害については今後の研究が望まれるが、上の試験から、本病による被害は發生時期、品種、環境等によつて各々かなりの變異が見られるものであることは確實である。

(農林省北陸農業試験場)